

日本の地域伝統漁法

道の駅 萩しーまーと

駅長 中澤さかな

第 562 号

(第48巻 第10号)

編集
発行

一般財団法人 東京水産振興会

日本漁業は、沿岸、沖合、沖合、そして遠洋の漁業といわれるが、われわれは、それぞれが調和のとれた振興があることを期待しておるので、その為には、それぞれの個別的な分析、乃至振興施策の必要性を、痛感するものである。坊間には、あまりにもそれぞれを代表する、いわゆる利益代表的見解が横行しすぎる嫌いがあるのである。われわれは、わが国民経済のなかにおける日本漁業を、近代産業として、より発展振興させることが要請されていると信ずるものである。

ここに、われわれは、日本水産業の個別的な分析の徹底につとめるとともに、その総合的視点からの研究、さらに、世界経済とともに発展振興する方策の樹立に一層精進を加えることを考えたものである。

この様な努力目標にむかってわれわれの調査研究事業を発足させた次第で冊子の生れた処に、またこれへの奉仕の、ささやかな表われである。

昭和四十二年七月

財団法人 東京水産振興会
(題字は井野碩哉元会長)

日本の地域伝統漁法

目次

第五六一号

伝統漁法との出会い..... 1
 萩市にも藩政時代から続く「しろうお四手網漁」が..... 3
 伝統漁法とは何か..... 5
 ローカルで引き継がれる「地域伝統漁法」..... 6
 第一章 水下曳漁(青森県東北町)..... 6
 知られざる豊かな湖「小川原湖」..... 11
 全面結氷した湖上で操業される「氷上しじみ漁」..... 12
 水下曳漁のルーツは諏訪湖..... 15
 先人の知恵、水下曳漁の漁具..... 16
 クラシックな水下曳漁の漁具..... 18
 温暖化影響で操業はここ一年で三シーズンのみ..... 22
 北海道網走では観光水下曳漁も..... 22
 第二章 打瀬網漁(熊本県芦北町)..... 22
 八代海に浮かぶ「白いドレス」の貴婦人..... 28
 打瀬網とは..... 30
 芦北での打瀬網操業は江戸末期..... 30
 一〇トン級船舶を使った比較的大規模な個人漁..... 32
 北海道野付湾でも小型打瀬網を操業..... 33
 風任せ波任せのスローな漁..... 34
 経営体数・水揚金額とも大きく減少..... 35
 昭和五六年から打瀬網観光体験を開始..... 38
 実績もあり有望な漁業体験プログラム..... 40
 第三章 しろうお四手網漁(山口県萩市)..... 43
 萩の早春の風物詩..... 43
 原始的でシンプルな古式漁法..... 44
 全国に残る四手網漁あれこれ..... 45
 小型漁船での操業が特徴..... 47
 資源減少で水揚量は低迷..... 48
 シロオオが萩市の大切な観光資源..... 53
 漁業者自らが資源回復に取り組み..... 54
 二秋「しろ魚まつり」は春先の定番イベント..... 55
 終章 伝統漁を無形民俗文化遺産に..... 55
 「伝統漁-伊勢志摩地方の海女漁」が国指定の文化財にエントリー..... 58
 「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」(水産)..... 65
 地域を越えて結集「日本の伝統漁業遺産群」..... 66

時事余聞 編集後記

なかさわ 中澤さかな



略歴

▽中澤さかな(本名・等)一九五七年滋賀県生まれ。関西学院大学卒。水産地理学専攻。一九八〇年(株)クルート入社、勤続二〇年で同社を早期選択定年退職し、二〇〇〇年四月、萩市に家族で移住。道の駅/萩市に1との駅長を務めるかたわら萩市の地域振興全般にかかわる。二〇〇七年総務省「地域力創造アドバイザー」、二〇〇八年内閣官房「地域活性化伝道師」、二〇〇一年農林水産省「六次産業化ポランタリープランナー」および「地産地消の仕事人」に認定され、全国各地の地域活性化(地域農水産資源の商材開発、道の駅・直売所等地域活性化拠点施設の整備計画)に取り組み。二〇一〇年より独立行政法人水産大学校の非常勤講師(水産消費マーケティング論)を務める。「ガイアの夜明け」「カンブリア宮殿」「がっちりマンデー」「新報道二〇〇一」などテレビ出演も多数。休日は自艇SAKANA A-IIで萩沖にて漁師修行。座右の銘は「三方よし」

日本の地域伝統漁法

道の駅 萩しーまーと

駅長 中澤さかな

伝統漁法との出会い

二〇〇七年、総務省から「地域力創造アドバイザー」を、内閣府から「地域活性化伝道師」を任命されたことがきっかけで、全国各地の産地を訪問する機会を得ました。あれから八年間、訪問した地域は北海道から沖縄まで約一〇〇か所、本業が魚屋ですので、その訪問先のほとんどが漁港・漁村地域です。そのうち三二か所は、二〜三か月に一度、継続的に訪問して、地域にある水産資源のブランド化や特産加工品の開発・

特産メニューの開発・道の駅や直売所の新增設などの案件をお手伝いさせていただきました。現時点でも全国一五地域が現在進行形です。

そのうちの一か所が青森県上北エリアにある東北町、知られざる汽水湖「小川原湖」の畔にある内水面漁業の町で、ヤマトシジミ・しらうお・天然ウナギ・ワカサギ・モクスガニなど全国トップクラスの産地です。初回訪問から、かれこれ六年のお付き合いいになりますが、三年前の二月に訪問した際、丁度その小川原湖が全面結氷、伝統漁「氷下曳漁」（しがびきりよう）を見学するチャンスを得ました。当日の気温は当然氷点下、手袋二枚重ねでも指先が凍えるような寒さの中、氷に穴を空け網を引く伝統漁法が目前で繰り広げられました。厳しい気候の中で、昔ながらのスローな漁法が脈々と受け継がれていることに、感動を覚えました。これが、僕が「伝統漁法」に、明確な興味関心を持つきっかけでした。

振り返れば、およそ三〇年前、大学で水産地理学を専攻していた僕が書いた卒業論文は「紀州雑賀崎漁民の生活誌」、その主要漁法は「真鯛のビシマ一本釣り」。急潮の中で道糸を弛ませないように等間隔に数十個の丸鉛錘（ビシ）を打った仕掛けで鯛を釣る古来からの漁法です。伝統漁との出会いは実はこの時だったのですが、長い間そのことを認識しないまま過ごしてきました。

萩市にも藩政時代から続く「しろうお四手網漁」が。

足元の萩市にも、藩政時代から引き継がれている伝統漁がありました。「しろうお四手網漁」です。四隅を竹で組んだ骨組みで吊るす形状の三畳から四畳半サイズの網を川底に沈め、シロウオの群れの通過を目視確認して網を揚げる、非常に原始的かつシンプルな漁法です。毎年二月中旬から四月上旬に操業されるシロウオ四手網漁の風景は、萩市の早春の風物詩になっています。

そして昨年八月、熊本県芦北町で遭遇した伝統漁が「打たせ網漁」です。静かな八代海に浮かぶ四本マストの打たせ船、「白いドレスの海の貴婦人」のニックネームに相応しい優雅な姿にほれ惚れました。幸運にも漁協組合長のご厚意にて乗船体験させていただく機会を得、その漁の一部始終を拝見することができました。漁場まではディーゼルエンジンで航行しますが、網代に着くとエンジン停止、風と潮流の具合を見て白帆を調整、まさに風任せ波任せのスローな漁が始まります。ちゃぼちゃぼと船舷を打つ波の音を聞きながら、慌ただしい日常を忘れ、ゆったりとした時間の流れに身を任せるような心地よい体験でした。

シロウオ四手網漁の風景は、萩市の早春の風物詩

「氷下曳漁」を見学した事が、「伝統漁法」に、明確な興味関心を持つきっかけ

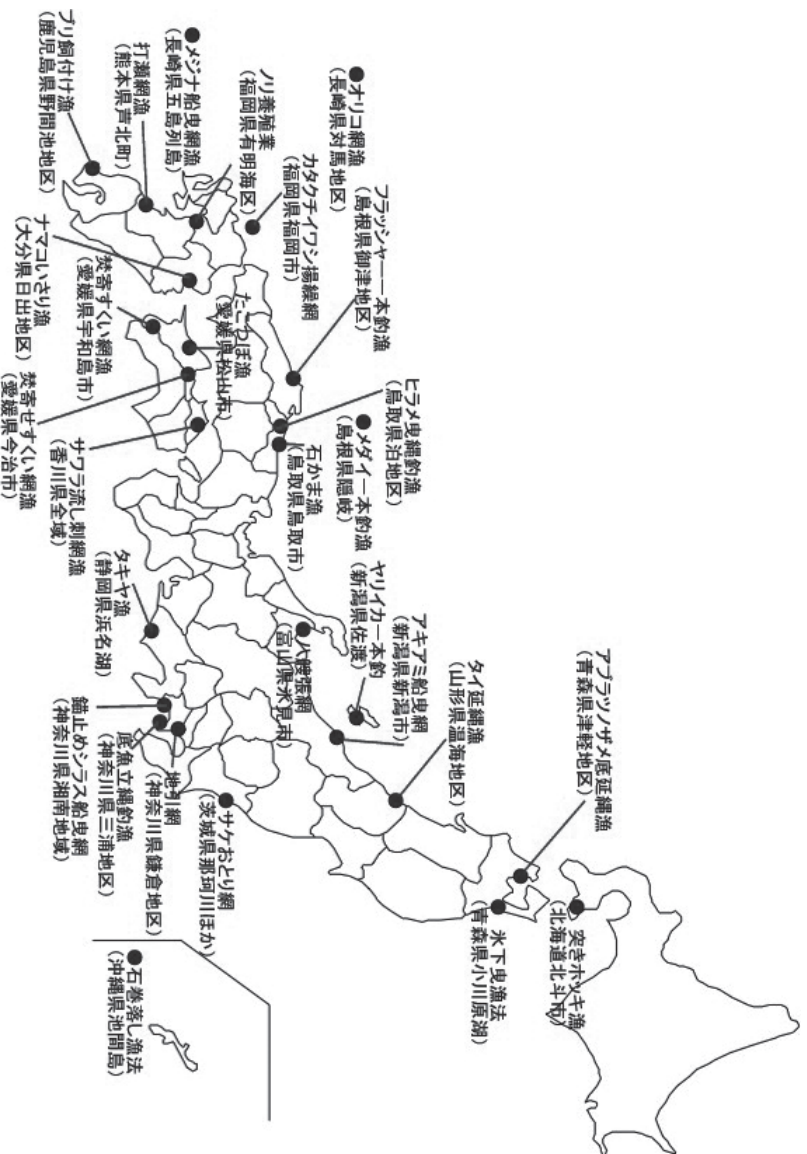


図1 「今に生きる伝統技能・漁法集」(総集編 1998.03 月 全国漁業協同組合連合会) に掲載されている28種の地域伝統漁法

伝統漁法とは何か

さて、伝統漁法とは何かということを、本題に入る前に整理しておかなくてはなりません。文献やWEBで調べましたが、個々の漁法についての研究やレポートは数多く見つけることができましたが、この分野を総合的に研究された資料には行き当たりません。比較的多くの事例を集めた報告書資料として、僕の手元に全国漁業協同組合連合会がまとめられた「今に生きる伝統技能・漁法集(総集編一九九八・〇三月)」があります。ここには全国各地で現在も継続されている二八種の伝統漁法が紹介されています。この報告書を当時監修された東京水産大学(現・東京海洋大学)の水口憲哉先生執筆による総論部分で、この報告書をまとめるにあたっての考え方を下記のように整理されています。

- ①省力化・技術改良等を経て現代まで継承され、かつ将来にわたって引き継がれる漁法(中断された漁法で復活の可能性のあるものを含む)で、資源維持や環境保全に資し、現実に漁業に有効な手段であるもの。
- ②漁業経営において実績があるもの。
- ③漁業者集団あるいは地域において共有され、普遍的であるもの。

水口憲哉先生執筆による三つの定義

僕は研究者ではありませんので、的確な定義を示すことなどできませんが、おおよそこんな感じではないかと自分なりに整理してみました。

●漁船や漁具が動力化される以前から、主に人力や風力・潮流など自然エネルギーを使って行われた「スロー」な漁法。

●対象魚種の生態や漁場の観察を通じ、漁民によって合理的に組み立てられ、改良・継承されてきた漁法。

●動力化・情報ハイテク化・効率化の進んだ現在では、主要漁法の座から退き、全国各地で消えつつある「産業文化遺産」もしくは「無形民俗文化財」的ともいえる漁法。

ローカルで引き継がれる「地域伝統漁法」

「伝統漁法」には「その地域独特の」というニュアンスが結構大きなウエートを占めている

このような定義では、現在我が国で行われている一本釣りや建網・刺網・壺網など小規模沿岸漁業のほとんどが伝統漁法のカテゴリに入ってしまうように思います。 「伝統漁法」には「その地域独特の」というニュアンスが結構大きなウエートを占めているように思います。その観点から「地域伝統漁法」としたほうが適切なワーディングかもしれません。

ここからは、前出の「今に生きる伝統技能・漁法集」に掲載された二八種の漁法から、特徴的なものについて、少し紹介することにします。

●突きホッキ漁（北海道北斗市上磯地域）

現在のホッキ貝漁は噴流式貝桁網が主流ですが、北海道の北斗市上磯町地域では昔ながらのホコによる突き漁が行われています。漁に使用されるホコは、長さ四〇センチメートルの金属四つ爪を六メートルの柄に装着しホッキ貝を挟んで獲る形状です。透明度が良い場合はガラス箱眼鏡等で目視して挟み獲ることもあります。ほとんどは「めくら突き」と称して無作為に海底を刺しながら移動する方法。機械による桁網漁業と違って非効率ではありますが、稚貝や若齢貝を獲ることはないので資源保護の観点から有効な漁法



写真1 突きホッキ漁に使用される漁具「ほこ」四つ爪の長さは約40cm、これでホッキ貝を挟み獲る。(渡島中部地区水産技術普及指導所)

●石かま漁（鳥取県鳥取市湖山地）

鳥取県の湖山地に残るこの地域独特の漁法が「石かま漁」です。起源は元禄年間とされていますので、約四〇〇年以上引き継がれてきた貴重な漁法です。湖岸近くの水深二〜三メートルの固い地盤の湖底に、五〇センチ大の石を組み上げて、上底二・六

石かまの内部には魚道が設けられ、最奥部が定置網の袋網のように入った魚が溜まる構造になっている

メートル、下底七、六メートル、高さ六、六メートルの台形状の石かまを組み上げます。石かまの内部には魚道が設けられ、最奥部が定置網の袋網のように入った魚が溜まる構造（この魚捕り部を胴函と呼びます）になっています。主要な対象魚は鮒で、漁は厳冬期一月〜二月に行われます。越冬のために石かまの積石の隙間に潜んでいる鮒を最奥部の胴函に順次追い込み、最後は掬い網で捕獲します。一回あたりの漁獲量が約四〇〇キログラムといますから、なかなか大したものです。湖山池の北岸に約二〇基を確認することができましたが、完全な形を留めていたのは掲載画像のものを含め数基のみで、他は水没したり石組が崩れていたりしました。



写真2 湖山池の石かま、手前が魚捕り部の胴函

●メジナ船曳網漁（長崎県五島三井楽地域）

五島列島の福江島三井楽地区で二五名からなる漁民団に引き継がれている古式漁法

前浜の地形とメジナの習性を知りつくした漁民団ならではの貴重な漁労伝統

です。漁場を見下ろす小高い丘に高さ八メートル（海面からは約五〇メートル）の魚見槽を建て、岩礁帯から砂地にメジナの群れが移動するのを目視で見張り、砂地への移動開始が確認されたら港の漁師小屋で待機している乗組員に伝達、ただちに出漁するという昔の合戦のような漁です。漁場でも物見の合図に従い船を移動し網を捲いていきます。漁期は北西に季節風が吹き始める一〇月から翌年の二月末まで。前浜の地形とメジナの習性を知りつくした漁民団ならではの貴重な漁労伝統です。

●石巻落とし漁法（沖縄県宮古島市池間島地域）

沖縄県宮古島市の池間島地区に伝わる伝統的な一本釣りの漁法

沖縄県宮古島市の池間島地区に伝わる伝統的な一本釣りの漁法です。明治四三年沖繩本島の漁民が出稼ぎ漁で来島、漁法を伝えこの地域に定着したものとされています。餌を付けた釣り針と撒き餌を、一キログラム程度の長形の石にハリスで巻き付け投入するというシンプルな漁法。宮古諸島周辺の水深七〇〜一五〇



写真3 ハリスを巻きつけエサの切り身を石にセットしたところ。大きな錘がないシンプルな仕掛けなので大型魚も仕留めやすい。（画像は坂田智子さん提供）

メートルの沖合天然礁に生息するオオヒメ・アオチビキ・ハマフエフキダイなどの高級魚種を対象として周年操業されています。漁船は一トン程度の小型で操業経費も比較的軽いため、高齢の漁業者を中心に今も多くの操業が行われています。

●ヤリイカ一本釣り（新潟県佐渡小木地域）

佐渡の小木地域で一〇〇年以上続いている低コストで簡便なヤリイカの漁法で、古来の一本釣りが引き継がれている。

佐渡の小木地域で一〇〇年以上続いている低コストで簡便なヤリイカの漁法で、地域の北西の季節風を避けた漁場で夜間操業されます。他地域でのヤリイカは主にイカツノを連結したイカ釣りもしくは底引き網・定置網等で漁獲されますが、ここでは古来の一本釣りが引き継がれています。漁具はハネ竿と呼ばれる二メートルのソリッド竿に釣り糸を結び、先端に竹ツノ（引掛け針）を結束、餌としてヤリイカや白身魚の短冊を綿糸で巻きつけて使用します。通常、一夜で三〇〜五〇パイの漁獲があり、しかも活魚で水揚げされるため単価も高く結構な収入となります。さらに漁場が港から一キロメートル以内の近場



写真4 水揚げされたヤリイカ、傷みも少なく高鮮度（佐渡地域振興局農林水産振興部）

であることや漁具が安価であるため手取り額の多い漁として現在でも盛んに操業されています。

●焚き寄せすくい網漁（愛媛県宇和島地域）

愛媛県の宇和島地域で大正時代から引き継がれているごく小規模な個人網漁

愛媛県の宇和島地域で大正時代から引き継がれているごく小規模な個人網漁です。日没後、一トン程度の漁船の乗り込み漁場で水中集魚灯を一時程度点灯し魚群を集めます。その後水中灯を船上のランプ灯に切り替え、ゆつくり櫓を漕いで浅瀬に魚群を誘導、船上から直径一メートル大のたも網で魚群を掬い取るものです。対象魚種はシラス（カタクチイワシの稚魚）で、機船船曳網で漁獲されたものより格段に品質が良く概ね一・五倍の価格で取引されています。地元宇和島漁協ではこの漁法で漁獲されたシラスを「すくいちりめん」と称してブランド化に努め、現在では地域を代表する高級特産品となっています。伝統漁による漁獲物に付加価値を付ける取り組みとしておおいに参考となる事例です。

このように現在我が国の各地方に、この「地域伝統漁法」が数多く継承されています。類似のものを分類整理しても軽く一〇〇種類を超えるのではないかと思います。それらの中には、まさにその継承のバトンが次世代に引き継がれないまま、消えてしまいうような漁法もあるはずですが、本稿では、僕が実際に漁体験させていただいた氷下曳漁

青森県の小川原湖、面積六三・二km²、平均水深約一一m、最大水深約二五mの汽水湖

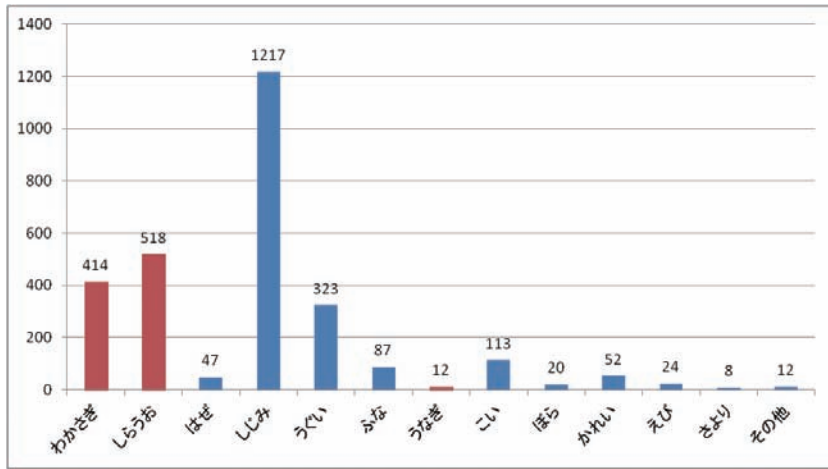


図2 小川原湖の魚種別漁獲量 (2013年度: 単位トン)
ワカサギ・シラウオ・天然ウナギの生産量は日本一

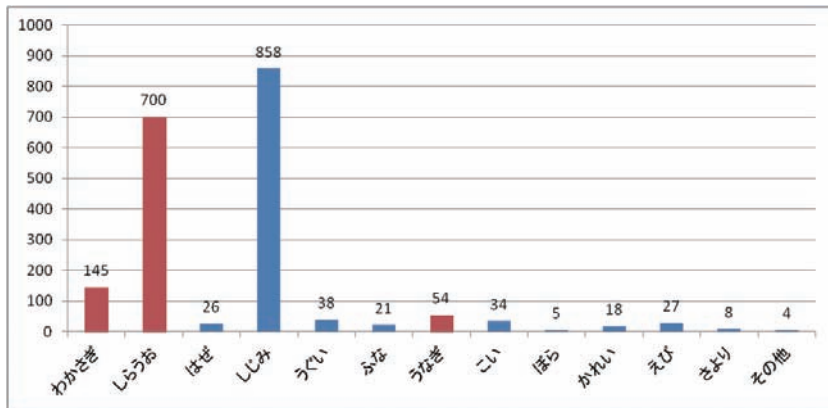


図3 小川原湖の魚種別漁獲高 (2013年度: 単位百万円)

(青森県東北町)：うたせ網漁(熊本県芦北町)・四手網漁(山口県萩市)の事例について、数少ない文献資料と実査および現役漁業者からの聞き取りにより、その過去から現在の姿を誌面に再現、今後の継承や地域が持つ特有資源としての活用について考察してみたいと思います。

第一章 氷下曳漁(青森県東北町)

知られざる豊かな湖「小川原湖」

青森県の小川原湖、面積六三・二km²、平均水深約一一m、最大水深約二五mの汽水湖です。わが国の湖沼で一番目の面積を持ちながら、ほとんど名前を知られていない湖です。約五〇キロはなれた十和田湖は全国的に有名で、青森県の主要観光地であるにもかかわらず、なぜ小川原湖が観光地として開発されなかったのか、最初はとても不思議に思いました。下北半島の付け根に位置し、シジミ、シラウオ、ワカサギ、



天然ウナギなど全国区でも魚種別トップクラスの生産量をマークしています。その小川原湖に面する主要地域が東北町、南は米軍基地のある三沢市、北は原燃処理施設のある六ヶ所村に隣接しています。

二〇〇九年九月中旬、内閣府から地域活性化伝道師としてアドバイザー役を仰せつかった僕ははじめてこの地を訪れました。折しもシジミ漁が解禁、全国一位の生産量を誇る名物シラウオも漁の最盛期でした。

現地に着くや否や、棧橋から漁協の監視船に乗ってシラウオ船曳網漁とシジミ漁を見学しました。船上で生まれてはじめて、網から掬い取った活きシラウオの踊り食いを体験し、この知られざる湖の実力を垣間見ました。

ただ、漁見学をしている間にも、ひっきりなしにF16戦闘機が切り裂くような轟音で頭上を飛んでいく、よそ者にはもの珍しくてもこれが日常となると厳しいだろうな、観光地化されず知られざる湖となった理由のひとつがわ



写真5 全面結氷した小川原湖にて、筆者と内閣府担当者：坂本氏

かったように思いました。ただし、観光地開発されなかったことで、湖岸がコンクリートで固められることもなく、生態系も守られ、我が国有数の内水面資源の宝庫が維持されたのです。

全面結氷した湖上で操業される「氷上しじみ漁」

この知られざる湖の豊かな内水面水産資源を地域のお宝と位置づけ、町民中心のプロジェクトチームで特産魚種のブランド化・料理メニューの開発や新たな加工製品群の開発を実施、そのアドバイザー役として足掛け六年のお付き合いです。

二〇一二年二月、最も寒さの厳しい時期も見えておきたいと、厳冬期の小川原湖を訪問。近年の温暖化傾向で小川原湖も全面結氷がみられない年もありましたが、この時は運よく湖中心部でも二〇センチを超える厚さで見事に全面結氷しました。漁協T氏のご案内で、噂には聞いていた氷下曳漁の見学です。当日の天候は薄曇り、風も弱く気温はマイナス五℃、このくらいはまだ温かいほうとのことでした。漁場となる湖の中心部まではスノーモビルに繋いだソリで移動です。漁場に近づくにつれ大勢の方々やチカラを合わせて網を引いている様子が小さく見えてきました。また湖のあちこちに七〇センチ程度の長方形の氷の塊が散在、これはシジミを獲るために空けた穴から取り出した氷塊です。穴に落ちこまないように目印として置いてあります。

町民中心のプロジェクトチームで特産魚種のブランド化・料理メニューの開発や新たな加工製品群の開発を実施、そのアドバイザー役として足掛け六年のお付き合いです。



写真6 漁場までの移動手段はスノーモビル、ロープでソリを連結し漁具を運搬する。

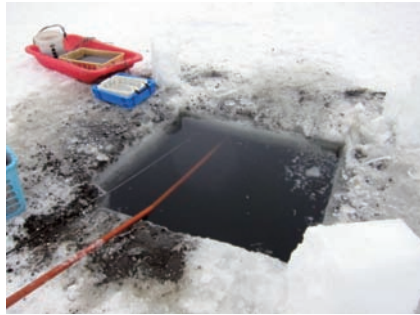


写真7 氷上に空けられたシジミ漁用の穴、一辺約1メートル。氷の厚さは約20センチ程度。この穴に長い柄のジョレンを差し入れる。



写真8 ジョレンに結束したロープをカグラサン（巻上機）で巻き上げる。重いので作業は2人かかり。



写真9 ジョレンを揚げたところ。結氷期は水温が低いためシジミは深く潜っているので一回あたりの捕獲量はこの程度。



写真10 水揚げされた大粒で鉛色のきれいなヤマトシジミ。寒シジミとして高値で取引される。

氷下曳の名前の通り、氷の下を網で引く漁法

氷下曳漁のルーツは諏訪湖

本題の氷下曳漁に入る前に、結氷期のシジミ漁について少し。通常期は二〇f tサイズのFRP船上から人力でジョレン（シジミ採取用の金属製専用漁具 写真9参照）を曳く方法でシジミは漁獲されていますが、結氷時は船を出せないため氷上で漁が行われます。漁場に到着するとまずチェーンソーで氷を切り出し、約一メートル四方の穴を開けます。そこに長い柄のついたジョレンを差し入れ、湖底の砂泥を掬うようなカタチでジョレンを曳きます。底辺の長さが約六〇センチと結構大きな重量のあるジョレンなので、人力のみではとても無理、カグラサンという名前の手動ウィンチを使って二人がかりで巻き上げていきます。一つの穴から四方八方と放射状にジョレンを差し入れる方向を変えて、穴の周囲の湖底を一通り浚^{さら}ったら一クールが終了、一〇メートルほど移動して二クール目に移ります。この漁は個人漁で通常期と同様、ご主人と奥様による夫婦操業です。この結氷期のシジミは、全国的に品薄時期でもあり「寒シジミ」として通常期よりも高値で取引されるとのことです。

さて、本題の氷下曳漁に話を進めます。氷下曳の名前の通り、氷の下を網で引く漁法です。歴史を遡ると長野県諏訪湖にて延文元年（一三五六年）頃の氷下曳漁の操業記録があるとのこと。秋田県八郎潟でも寛政六年（一七九四年）に導入が始まり、

現在では諏訪湖・八郎潟からは
 水下曳漁は姿を消しており、本
 州において唯一現存するのが小
 川原湖の水下曳漁

ここ小川原湖には明治末期に八郎潟の漁師が移入したと伝えられています。〔明治期の小川原沼の漁業〕から 現在では諏訪湖・八郎潟からは水下曳漁は姿を消しており、本州において唯一現存するのが小川原湖の水下曳漁です。小川原湖漁業協同組合の組合長にお聞きしたところ、昭和四〇年代頃までは五〜一〇組程度（一組約二〇名）の操業が行われていたようですが、五〇年代に入ると暖冬傾向で全面結氷することが少なくなり、ここ一〇年で見ると二〜三シーズンしか操業できていないとのこと。漁網の設え、漁場の選定、漁網・ロープのセッティングなど、一連の工程に知識経験が必要で、その熟練の技を継承するためにも結氷した年には七〇歳代の師匠を筆頭に若い漁師も参加して操業しているという。商売として操業するというより、何とかこの貴重な伝統漁を守り次代に引き継ぎたいとの思いで漁師さんたちが努力しているとお話でした。

先人の知恵、水下曳漁の漁法

さて、どうやって氷の下に網を入れて曳くのか、漁協職員のT氏から略図を見ながら何度も説明していただきましたが、いまいち理解ができていませんでした。現場に行って操業の様子を見てようやく納得、漁法のあらまは次のとおりです。

最初に網を投入する場所（イレアナⅡ入れ穴・大きさは長さ五メートル×幅三メー

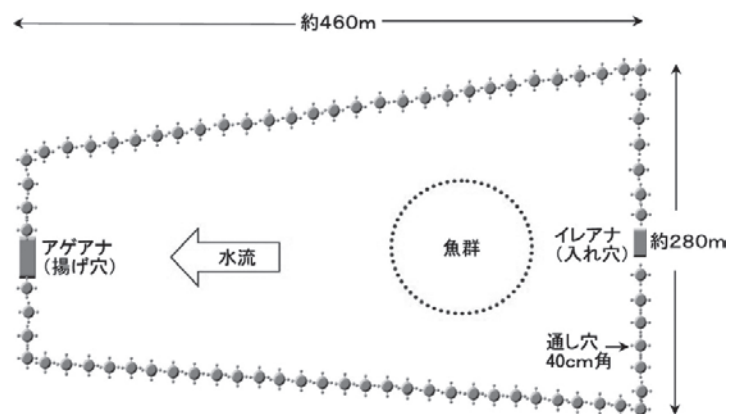


図4 漁場のセッティング概略図

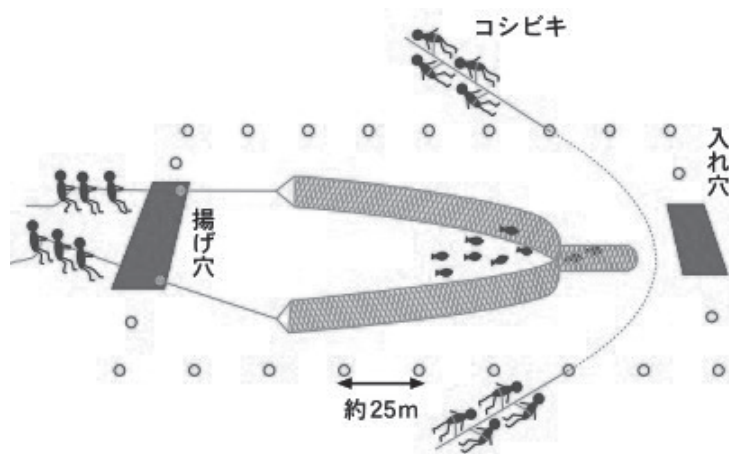


図5 水下曳網漁の操業イメージ図（東北町広報 2006.03月号より）

トル程度)を決める。入れ穴を中心に左右に二〇メートル間隔で四〇センチ四方の穴を八か所ずつ空ける。さらに最後八個目の穴から直角に切り返してアゲアナ(Ⅱ揚げ穴・網を揚げる穴・大きさは長さ一〇メートル×幅四メートルのやや台形形状)に向かって同じく四〇センチ四方の通し穴を二〇メートル間隔で二五か所ほど空ける。その通し穴にロープを結んだツナトオシ(Ⅱ綱通し・幅一〇センチ長さ二三メートルの竿状の杉板)を差し入れ、穴から穴へと順番にロープを氷下にセットしていく。ロープをセットするための通し穴は直線状に二〇メートル間隔で空けられているので、長さ二三メートルのツナトオシを氷の下面(実際の水面)に浮かせながら押し込んでいくと、次の穴にツナトオシの先端が現われ、それをさらに送り込んでいくとまた次の穴に到達する仕掛け。直角方向にカーブする箇所ではツナトオシを一旦引き揚げ、方向転換して差し入れていく。このように片側数十か所に空けられた通し穴に順番にツナトオシを送り込んで、最終のアゲアナに到達した段階でロープのセットが完了する。通し穴を使ってセットしていくロープ(ガイドロープ)は操作性を考慮して一二ミリの径の細手が使用され、その先は網揚げに使用する一六ミリの太径ロープで漁網につながっている。

なかなか言葉では説明し辛いので、漁具セッティングの概略図を参照ください。



写真11 氷に穴を開ける道具は、ブレードの長いエンジンチェーンソー。



写真12 長さ10メートルのアゲアナ(揚網用の穴)



写真13 コシビキ(腰曳き)といって、手で曳くのではなくロープに腰板をセットして身体全体で曳いていく。



写真14 氷下曳漁の網揚げ。総勢20名でゆっくり網を曳いていく。袋網を揚げるまで約30分の作業。

クラッシュクな氷下曳漁の漁具

漁具として特徴があるのは、ガイドロープをセットする際に使用されるツナトオシ

次に使用される漁具を見ていきます。網はナイロン製で高さ約二〇メートル・全長は約二六〇メートル。ロープに近い順番で一〇〜一四節が五〇メートル、次に二〇〜二四節が一〇〇メートル、続いて二九〜三三節が一〇〇メートル、最後の袋網は六〇〜六五節で一〇メートルの構成です。網の上端には浮子が付いています。通常期に小川原湖で使用される船曳網とほぼ同様の構成のようですがサイズはかなり小型です。漁具として特徴があるのは、ガイドロープをセットする際に使用される前述のツナトオシです。幅一〇センチ長さ二三メートルの平べったい竿形状で、三メートル程度の杉材を七本継ぎにして作られています。継ぎ目はクギ止めで頑丈に加工され、また網やロープが引っかからないように表面は丸みをつけて研磨してあります。また作業中にガイドロープを引っかけるためのカギは、栗の木の枝分かれ部位を利用して自作されています。作業しやすいように柄の部分にもカーブが付けられていて、見た目にも味のある小道具でした。また重い網を身体全体で曳くための腰板（コシビキ）も特徴のある小道具です。その他、氷を切り出すためのチェーンソーや切り出した氷を引き上げる大型の手カギ、そして漁網や小道具を運搬する専用のソリ、そして移動用のスノーモビルがこの氷下曳漁に使われる装備一式です。



写真 15 氷の下にガイドロープをセットするための専用漁具「ツナトオシ」、杉板製で全長は23メートル。



写真 16 ガイドロープを引っかけるための手カギ、栗の木の枝分かれ部位を利用して自作。



写真 17 割った氷を引き上げるツルハシのような道具、かつてチェーンソーの無い時代、このツルハシで穴を開けていた。その他手網、ガイドロープなど。



写真 18 漁網・漁具運搬用のソリ、クラッシュクなスタイルです。

温暖化影響で操業はここ一〇年で三シーズンのみ

網を入れるイレアナの決定から、網揚げまでの一クールが約三〜四時間、漁に参加する約二〇名が力を合わせて操業する集団漁

網を入れるイレアナの決定から、網揚げまでの一クールが約三〜四時間、漁に参加する約二〇名が力を合わせて操業する集団漁です。この日の漁は厳冬期にしては比較的穏やかな天候であったため、それほど厳しいという感じではありませんでしたが、それでも冬用防寒手袋二枚重ねで着用していた指先が凍えて痛みを感じる状態でした。水揚げはワカサギ・シラウオが中心、ワカサギの一部は抱卵している個体もあり、厳しい氷の下でもすくすくと命が育っているのだと感じ入りました。

当日聞き忘れたのですが、この日の水揚量は入網した目測量で一〇〇kg程度、比較的シラウオが多かったので単価六〇〇円/kgとしても総額で六万円、参加者の均等配分ということでしたので、一人当たりの収入は単純計算で三千元となります。こう計算すると極寒中の四時間の作業報酬としては全く割りにあっていないように思い、その旨単刀直入に漁協T氏に質問しました。「冬場に全面結氷してしまうと通常の漁船による操業ができなくなり、何日も遊んでしまうことになる。それでは生活ができないので、たとえ水揚げが少なくても風の弱い条件の良い日には氷上漁に出るのです」との回答でした。

翌年二〇一三年二月にも再び全面結氷、小雪が舞うものの風が弱い日だったので、



写真19 網揚げの最終段階、袋網を絞っていきます。



写真20 捕獲したワカサギ・シラウオを手網でコンテナに移していきます。



写真21 当日はワカサギにシラウオが混じる。



写真22 ワカサギは抱卵している個体も。

表1 氷下曳漁の操業実績（過去10年間：単位kg）

平成23年2月〜3月は本格的な全面結氷で近年では最も多い操業回数となった。

	操業回数	シラウオ	ワカサギ	フナ	コイ
平成13年	2	0	6,250	335	110
平成18年	3	0	478	0	0
平成23年	29	797	3776	0	238
平成24年	3	0	0	0	100

漁協のT氏にお願いしてスノーモビルで漁場まで出向きましたが、この日は氷上シジミ漁のみで、氷下曳漁は行われていませんでした。そして今年二〇一四年二月も現地入り、今年は冷え込みが弱めで岸近くが結氷せず氷上漁はできないということでした。ここ一〇年の状況を聞いてみると、全面結氷する年は一〇年のうち二〜三シーズン程度、しかも全面結氷期間が短くなっている。従って氷下曳漁の出漁回数も一シーズンに数回程度と徐々に先細りしているとのことでした。温暖化による抗^あえな原因とはいえ、この伝統漁の継承継続が決して明るいものではないと悲しい思いになりました。

北海道網走では観光氷下曳漁も

この氷下曳漁、同様の手法で北海道の網走湖でも操業されていることを知人から聞き、早速WEBで情報収集しました。対象魚種はワカサギがメイン。漁の方法は小川原湖とほぼ同様、網揚げにエンジンの揚網機を使用し従事者を三名と省力化しているのが相違点です。そして最も大きく違うのが、この氷下曳漁を観光資源として活用していることです。

一月末から二月末の日曜日限定で、観光客に氷下曳漁の網揚げ体験をプログラム提供するもの。価格は大人二、五〇〇円、子供一、五〇〇円、定員二五名の完全予約制となっております。

小川原湖の内水面漁業はブルー
ツーリズムプログラムとして有
望

実は六年前、初めて小川原湖に現地入りした時から、小川原湖の内水面漁業がブルーツーリズムプログラムとして有望ではないかと思っていました。外海と違ってシケ影響でプログラムキャンセルという可能性は低く、しかも内水面なので事故リスクも格段に低い。提供できるプログラムもシラウオ船曳網漁やジョレンを使ったシジミ漁など、他地域ではあまりお目にかかれないものばかり。現在は使用されなまま、湖畔の道の駅に陸揚げされている小型の遊覧船もある。さらに冬季全面結氷時には、幻の伝統漁法ともいえる氷下曳漁や氷上シジミ漁などスペシャルな漁業体験ができるとなれば、都市部在住の方々にとつてはこの上もない非日常な体験として注目されるはず。同じ青森県内で「地吹雪体験ツアー」などがお客様を集める当節、この競争優位性のあるプログラムを以てすれば、プロモーションのやり方で何ともなるように思います。このことは、お世話になっている漁協T氏に度々進言しているものの、未だに実現を見ていませんので、しつこく言い続けることにしま



写真 23 通常時のシラウオ船曳網の操業風景。この漁風景を真近に観て、網揚げを体験できるようなプログラムができればと思う。

す。

第二章 打瀬網漁（熊本県芦北町）

八代海に浮かぶ「白いドレスの貴婦人」

我が国古来の伝統漁法「打瀬網漁」が現在も一定の規模で継承継続されているのが、熊本県葦北郡芦北町

我が国古来の伝統漁法「打瀬網漁」が現在も一定の規模で継承継続されているのが、熊本県葦北郡芦北町です。熊本県の南部、八代海（不知火海）に面する人口二万人弱の町、僕の初回訪問は昨年二〇一三年の八月です。芦北町に隣接する津奈木町・水俣市（水俣・芦北エリア）の農水産資源を地域活性化のネタにしようという三か年プロジェクトのアドバイザー役を仰せつかり、その後二か月に一回の頻度で現地入りさせていただいています。初回訪問時はこのエリアの概況を把握するため、初日は水俣市、翌日は芦北町と主要な農水産物の産地や加工場を訪問させていただきました。その際、芦北漁協の日組合長のお取り計らい



通常の漁船よりスマートで、しかもすらつと伸びた四本マストと、船首と船尾から突き出したビームがなんともスタイリッシュ

で現役の「打瀬網船」に乗船、古式の打瀬網漁を体験するチャンスに恵まれました。正直、古式打瀬網に関する知識は、北海道の野付湾で行われているホッカイシマエビ漁を書籍で読んだ程度で、まさかこの地域で操業されているとは知りませんでした。まず驚いたのは、ポンツーンに係船された打瀬網船のプロポーションの美しさでした。通常の漁船よりスマートで、しかもすらつと伸びた四本マストと、船首と船尾から突き出したビームがなんともスタイリッシュ。自身も素人船頭として船を所有する身、ああ美しい船だなあと羨ましい想いで何枚もシャッターを切りました。操業中の白帆を広げた姿は、自分自身が乗船している船でしたので、眺めることはできませんでしたが、陸に上がってから漁協の事務所に貼ってあったポスターでその華麗な姿を確認できました。ポスターのキャッチフレーズには「海の貴婦人」、まさに納得のネーミング、それにしても美しく万人を魅了するインパクトを持っているなあとし



写真 24 「白いドレスの海の貴婦人」と呼ばれる打瀬網船、すばらしいプロポーション。（芦北町観光協会）

ばらくポスターに目が釘付けになりました。

打瀬網とは

打瀬網を事典で調べてみると次のような記述で解説されています。

うたせあみ【打瀬網】 手操網（てぐりあみ）から進歩した底引網の一種。網を引くには人力の代りに風力や潮力を利用した。主要なものは風力利用の打瀬網で、帆力によって船を横に走らせながら、水底に入れた漁網を引き回し、それから漁網を引き揚げるものであった。潮力利用のときは水中にむしろや古帆の類を垂下したりして、それに潮流を受け、その力で水底の漁網を引いた。打瀬網がいつごろから使用されたものであるか明らかではないが、和泉岸和田地方のそれは宝永年間（一七〇四―一一）の創業であるといわれている。（世界大百科事典 第二版）

芦北町の資料では打瀬網を次のように紹介しています。

打瀬船の起源は、およそ四百年前、瀬戸内海が本場とされ、当地へ伝わってきたのは明治の初期といわれています。打瀬網の基地である計石（芦北町計石地区）は、天正八年（一五八〇）相良軍が島津の水軍を迎え撃って撃退しました。また、慶長二年（一五九七年）にオランダ船が平戸に先立ちこの港に立ち寄り交易を求めました。当時の計石には細川藩時代に遠見御番所が置かれ、芦北の浦々にはお抱え水夫（海上輪

打瀬船の起源は、およそ四百年前、瀬戸内海が本場とされ、芦北町へ伝わってきたのは明治の初期といわれている

送等に従事する船員）も多く居ました。これらの水夫は藩の御用によって、日本漁業の先進地である近畿地方に度々出張し、他所での漁業を見聞する機会を得ました。このことから、打瀬網漁業が積極的に導入されました。現在用いられているような網は、合採網（がっさいあみ）といつて幕末から明治にかけて普及したものです。これは、一名「芸洲流し」といい芸洲（広島）の漁師が芦北ではじめたのが起りです。芦北では打瀬網のことを「流れ船」と呼び、底引き網を帆船で引く漁法で、収獲は主にクルマエビ、イシエビ、カニ、シヤコなどです。（芦北町公式ホームページ）

芦北での打瀬網操業は江戸末期

これらの資料によると、打瀬網の起源は古く四〇〇年前、この芦北に導入されてからもうすでに一五〇年が経過している古式漁法であることが解ります。別の資料によると、漁船が動力化される明治大正期までは瀬戸内海を中心に東京湾などでも盛んに操業されていた記述があり、その後の漁船の動力化により非効率な漁法として淘汰されてきたようです。ある一定の規模で現存するのは、ここ芦北町とお隣り鹿児島県の出水市、そして北海道野付湾と数少ないようです。

それでは、非効率な漁法として全国的に淘汰され衰退した打瀬網漁が、なぜ芦北に残ったのか？という疑問が出てきます。それも一〇二隻が細々と継続操業しているの

ある一定の規模で現存するのは、ここ芦北町とお隣り鹿児島県の出水市、そして北海道野付湾と数少ない

ではなく、芦北の稼働船数は現在も一八隻と一定の船団を組める規模です。これについては確かな事は言えませんが、早くからこの打瀬網船を地域の観光資源と位置づけ、地元漁協や漁業者自らが観光漁業に取り組み、減少する漁獲収入を補填してきたことが大きいと思います。また地元行政や熊本県も、打瀬網漁を貴重な地域資源と認識し、保護と維持に取り組んできたことも見逃せないように思います。

一〇トン級船舶を使った比較的大規模な個人漁

それでは芦北町の打瀬網漁の漁法・漁具を見ていきましょう。使用される打瀬網船は一〇トン級と比較的大きなものです。船型はスクーナー（洋型船）の影響を受けたスマートなタイプ。主機は三〇〇〜五〇〇馬力のディーゼルインボードエンジンで、網代までの移動はこの主機で航行します。マスト（帆柱）は四本でそれぞれ高さ六〜七メートル、船首と船尾には可動式で水平に張り出す六メートルのビーム（遣り出し）がセットされています。

袋網は網口幅が約一メートル・高さが五〇センチ程度・長さが約五メートル、袖網は長さ四メートル、網の底部には小石等の小沈子、上部には浮子を付け、約六メートルの「前口竹」と呼ばれる張り竹（現在は硬質の樹脂製）で広げた三〇メートルの又網を経て七〇〜一〇〇メートルの曳網に繋ぐ。広げた又網の両端には自然石を研磨し

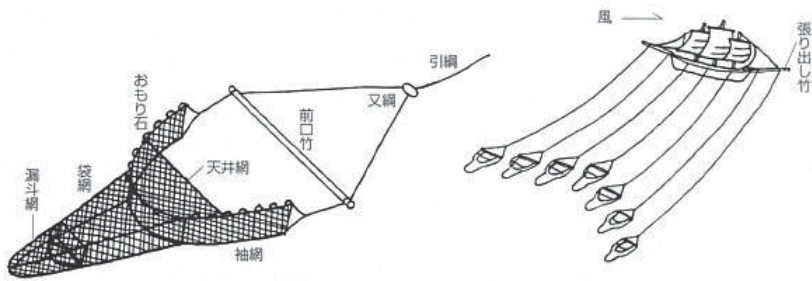


図6 操業状況と漁網のイメージ図（熊本の水産業より）



写真25 計石の漁港に係留された打瀬網船をバックに。



写真26 船舶は10トン級と大型で船体もスマートな形状。

た約八キログラムの錘を、結束部にはそれより大き目一〇〜一五キログラムの石錘を着装して着底を確実なものにしています。漁網は思つたより小さくコンパクトな構成で、船首から船尾にかけて同時に七統の網を曳くことができます。(小型のエビ桁網の場合は最大で一四統程度まで) 漁網の構成は図6を参照ください。漁期は通年で、盛漁期は六月〜八月中旬のヒラメ類、一二月から翌年二月上旬のエビ類(足赤エビ・イシエビなどを漁獲するエビ桁網)です。特に冬場の足赤エビは芦北町の特産品として珍重されています。

北海道野付湾でも小型打瀬網を操業

北海道野付湾で行われているホッカイシマエビの打瀬網漁

参考までに、北海道野付湾で行われているホッカイシマエビ(標準和名・ホッカイエビ)の打瀬網漁にも触れておきます。動力を使用せず帆を張り風力により操業を行うのは芦北と同様ですが、漁に使われる船舶は一〜二トン程度のFRP船外機船、芦北の一〇トン級に比較するとかなり小ぶりです。帆柱も二本でコンパクトな三枚帆です。漁獲対象のホッカイシマエビは、その一生を通じてアマモ場(アマモと呼ばれる海藻類の群落)に依存するため、漁船が動力化されてからも、スクリューでアマモを傷つけないように打瀬網が主力漁法として引き継がれてきています。漁の歴史は明治時代に遡るということで、「北海道遺産」にも登録されています。

風任せ波任せのスローな漁

体験乗船した当日(二〇一三年八月二〇日)は、穏やかな天候で、海は風で南よりの微風。計石の漁港を出発、対岸の天草半島との中間にある漁場を目指して船はゆっくり進みます。船体の割に主機の馬力が小さいので速力は一〇ノット程度です。周りの景色を楽しみながら約三〇分で網代あじろに到着。主機を停止し、風の具合と潮の流れを確認しながら、マストに白帆を上げる作業が始まります。船首船尾にスライド式のビームを張り出し、こちらには三角形の帆をセット、そして既に準備してあった網が投入されました。当日は短時間の体験ということだったので、網入れは三統、のったりゆったり、風任せ波任せのスローな古式漁がスタートしました。南からの微風はほとんど落ちて潮の流れだけでじわじわ動くような感じで、漁としてはあまり芳しくないコンディションとのことでした。その間、船頭さんは帆の張り方を調整したり、網のロープを調整したりで結構忙しくされておられましたが、乗船している僕たちはちよっと退屈な時間となりました。体験プログラムでは、この間にタチウオを釣ったりするオプションが用意されているとのことでした。

投網から約一時間、日暮も近づいてきたので網揚げすることに。船内何か所かに設置されているウインドラス(電動の巻揚げ機)で網を回収していきます。袋網の部分



写真 32 揚網はこの大型のウインドラス（ローラー）で巻き揚げる。これによって網揚げの労力が削減され、2人での操業が可能となった。



写真 34 最初の網に入った漁獲物、小イカイシエビ・シタピラメ・エソ・シャコなど。



写真 27 当日、漁に同行させていただいた親盛丸の小崎さんご夫妻



写真 28 漁場に到着すると船内に格納していたビームを船首・船尾に突出し固定する。



写真 33 袖網の部分からは2人で息を合わせて揚げていく。



写真 35 メインのイシエビ、体長10センチ程度。殻が固いのでこの呼び名。



写真 29 風と潮を読みながら、メインの帆を上げていく。操業中何度も調整されていました。



写真 30 漁網の1セット。黒い樹脂性のポールは網口を広げる張り棒、錘は自然石を平らに加工している。



写真 36 当日は残念ながら獲れなかった芦北名物「アジアカエビ」



写真 31 舷側から、絡まないように静かに漁網を投入していく。

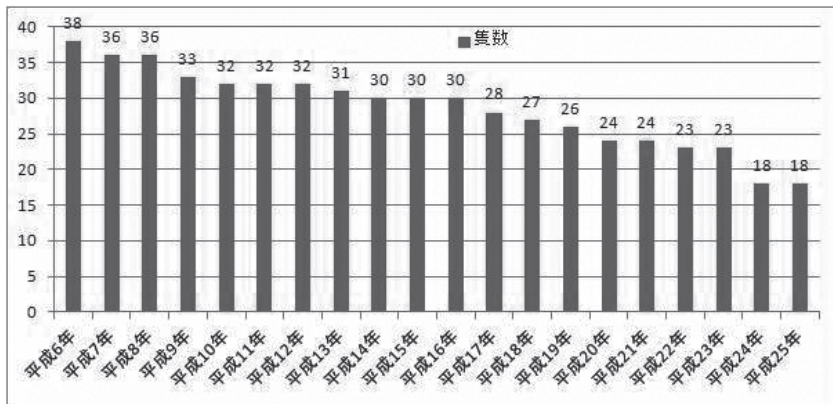


図7 打瀬網漁の経営体数 (提供: 芦北漁協)

昭和30年代には100隻を超えていたが、現在では18隻と激減している。



図8 打瀬網による漁獲高推移 (提供: 芦北漁協)

操業隻数減少・資源変動・魚価低迷により5年間で半分程度になっている。

この二〇年で経営体数・漁獲金額ともに一／三以下と大きく減少

さて、この打瀬網漁、生業として成立しているのかどうかについても気になりました。漁協の組合長に用意していただいた資料を拝見すると、平成二五年時点の操業隻数は一八隻、漁獲金額は二、四七〇万円となっています。グラフにはありませんが、平成五年度の数字をみると操業隻数が四三隻、漁獲金額が一、三三二万円でしたので、この二〇年で経営体数・漁獲金額ともに一／三以下と大きく減少していることとなります。この収入減少分を補完し、またこの打瀬網漁を将来に引き継いでいくためのひとつの手法として、観光打瀬網体験が早くからスタートしたのです。

経営体数・水揚金額とも大きく減少

が揚がってきてからは人力で丁寧な船上に水揚げします。残念ながら漁況の良くない日でしたので、獲物はごくわずか、イシエビ・シヤコ・小イカをメインにヒイラギ・テナジクダイなどの小魚の混獲を含めて、ひとつの網で二キログラム程度でした。船上で生きたままのイシエビ、醤油をたらして頂きましたが、このうえ無い鮮度で極上の味でした。

昭和五六年から打瀬網観光体験を開始

打瀬網観光体験の概要は次のようなものです。営業は四月一日～一月三〇日まで、体験料金は一隻貸切（二名定員）で四三、一〇〇円（税込・以下同）、オプション（二〇、八〇〇円と二一、六〇〇円）で船頭手作りの船上料理を楽しむこともできます。一航海が約三時間、漁場までの往復クルージングと、網入れ・網揚げを体験できます。操業は約二時間なので、この間にタチウオや小物釣りを楽しむこともできます。この体験プログラムが始まったのは今から三二年前、一九八一年（昭和五六年）と結構歴史は古く、当時産声を上げたブルーツーリズムのはりりだったと言えます。二〇〇五年（平成一七年）にはトイレ・エアコン完備のレディース船も建造され女性グループの人気を集めています。予約は観光協会や漁協等を窓口で電話・FAXで、インターネットの専用フォームでの予約もできるようになっています。

首都圏・中京圏・関西圏の修学旅行プログラムとして毎年一定数の利用があるほか、企業職場の団体旅行や個人グループの利用も増加してきています。二〇一三年度の利用者総数は約四、一〇〇名、乗船料収入合計は約一、三〇〇万円です。過去五年間は同様の数字で推移していますが、かつては稼働船数も多く一万人（二九四年頃）を超える利用者があったとのことでした。

二〇一三年度の利用者総数は約四、一〇〇名、乗船料収入合計は約一、三〇〇万円

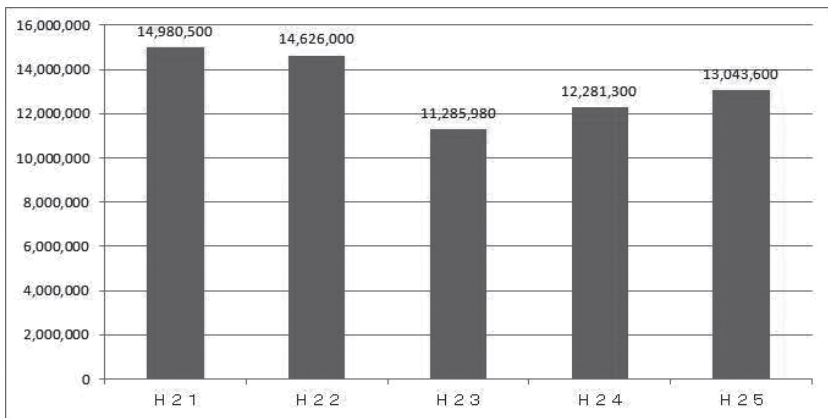


図9 観光打瀬網の売上高（提供：芦北漁協）
ここ5年は平均1,300万円程度で推移している。

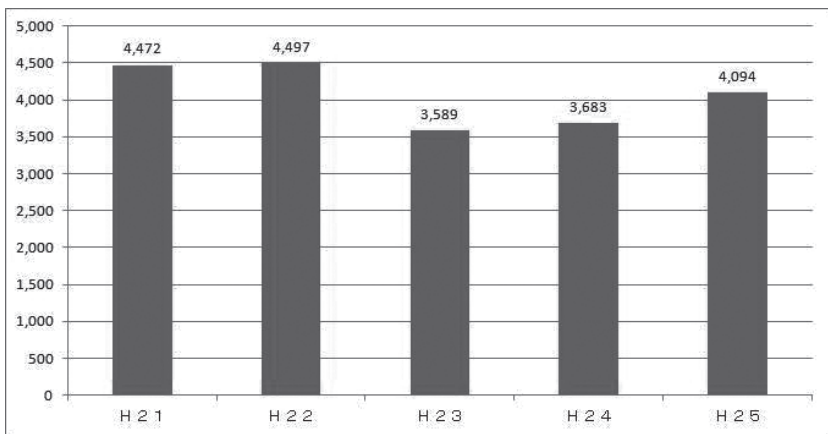


図10 観光打瀬網の利用者数（提供：芦北漁協）
年間3,500人から4,500人（提供：芦北漁協）

実績もあり有望な漁業体験プログラム

観光打瀬網はかなり満足度の高いもの

僕自身も仕事柄、全国の漁港漁村地区で実施されている漁業体験を数多く見、実際に体験もしてきていますが、この観光打瀬網はかなり満足度の高いものだと思います。しかも、八代海内の平水域での実施なので安全性も高く、船酔いの心配も少なく、また自然のチカラや古くから受け継がれてきた日本伝統文化に触れる貴重な機会として、子供たちにはぜひ体験してもらいたいプログラムだと感じます。但し、人数が揃わないと一人当たりの体験料が高額になること、また体験に要する時間が前後の準備を含めると半日掛かりになるなど、一般客向けのさらなる利用促進のためには、プログラムを軽いバージョンに組み替えて行く必要もあるかと思っています。現地で



写真 37 トイレ・エアコン完備の「レディース船」(芦北町観光協会)

今年の六月、芦北町の水産物販売の拠点施設として「芦北漁協直売所」の整備検討委員会がスタート

も短時間・安価で体験できるショートプログラムの試行が始まっているところです。折しも今年の六月、芦北町の水産物販売の拠点施設として「芦北漁協直売所」の整備検討委員会がスタートしました。供用開始は二〇一六年三月予定とまだ先ではありますが、熊本県広域の一般客が定常的に利用する直売所として計画されており、観光打瀬網体験の一般客利用も十分に見込めます。僕も同委員会のアドバイザー委員を仰せつかっていますので、所要六〇〜九〇分ショートプログラムの土日祝定期運行の可能性を検証し、テスト運用を提案してみたいと思っています。

第三章 しろうお四手網漁 (山口県萩市)

萩の早春の風物詩

萩の早春の風物詩とも言われるシロウオ四手網漁。桜前線が北上する約一ヶ月前、日本列島を南から北へとシロウオ遡上のニュースが移っていきます。萩では、松本川の雁島橋付近で、昔ながらの四手網と呼ばれる四畳半〜六畳大の四角の網を使って、シロウオを獲ります。かつては河口近隣の農民が農閑期の生業として、藩主にシロウオ漁の特別許可をもらって操業したと伝えられています。現在は船からの漁ですが、当時は岸から四手網を使って獲ったようです。シロウオの大きさは四〜五センチ程度、

鉛色の半透明の魚体は、何かの稚魚のように見えますが、これでも立派な成魚、この時期に産卵のために川を遡上します。萩での漁期は二月下旬から四月の上旬。毎年漁獲量の変動がありますが、平成になってからは年平均の漁獲量は三〇〇kg程度、軽トラ一杯分ちよつと考えると考えると少なくて、希少な魚と言えます。なお萩で獲れるシロウオ（素魚）はハゼ科、シラウオ（白魚）はシラウオ科、よく混同されませんが全く別種です。



写真 38 シロウオ やや鉛色かかった透明で体長4～5センチ程度。ハゼの仲間で腹部に吸盤がある。

原始的でシンプルな古式漁法

現存する網漁業の中でも最も原始的な漁法

さてこの四手網漁、四角形の敷き網の四隅を竹材などで吊るし、水底に沈めておいて魚が通過したところを掬い揚げるといったもので、漁具・漁法ともいたってシンプル。現存する網漁業の中でも最も古風、というより最も原始的な漁法ではないでしょうか。静岡県の伊場遺跡（奈良時代）からは「有樋十字形木製品」が出土しており、これはその形態の特徴から明らかに四手網の部分であることが想定されています。四手網を組み立てる際の竹竿の結束部に要の役目を果たす部品であったようです。同じ静岡県の古墳時代の遺跡からも四手網の一

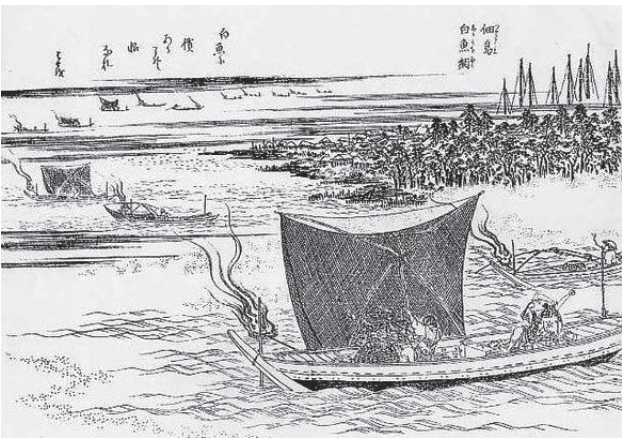


図 11 佃島白魚網の図（江戸名所図絵）
網の形状・竹を組んだ枠など、ほぼ現存の萩シロウオ四手網と同様。

部が出土、少なくとも四手網の起源は古墳時代まで遡ることができます。それ以前の考古資料はありませんが、漁網自体は縄文期においてその存在が確認されていますので、簡単な構造の四手網のよなもの、おそらく狩猟採取生活が営まれていた縄文時代まで遡ることができるとは思いません。

平安時代以降、古くからの漁法として文書記録に登場

平安時代以降は古くからの漁法として文書記録に登場します。最も古い記録は一二世紀・平安時代末期の「中尊寺経巻見返絵」、鎌倉時代の「石山寺縁起絵巻」には一人で四手網を使っている場面が描かれています。その後、江戸時代になると「魚鑑」や「江戸名所図絵」に収録されているのははじめ、浮世絵のテーマとなるなど非常にポピュラーな漁法であったようです。



写真 39 四手網の模型、非常にシンプルな構造です。
(山口県漁業協同組合萩地方卸売市場作成)

全国に残る四手網漁あれこれ

現在、漁業としてこの四手網が操業されている地域は、岡山県児島湾沿岸地域や鳥取県東郷湖、和歌山県の広川下流域、長野県の諏訪湖、滋賀県琵琶湖、そして山口県萩市松本川下流域など

現在、漁業としてこの四手網が操業されている地域は、岡山県児島湾沿岸地域や鳥取県東郷湖、和歌山県の広川下流域、長野県の諏訪湖、滋賀県琵琶湖、そして山口県萩市松本川下流域などが挙げられます。児島湾沿岸地域では一辺が八メートルもある大型の四手網を使用、主にヨシエビなどのエビ類や地元でベイカと呼ばれる小型イカなどを捕獲しています。現地に行くくと海面に突き出した形で多数の専用小屋が設置され、独特の景観を作り出しています。網を吊るす竹材の交差位置に集魚灯の役割をする電球が取り付けられ、漁は主に夜間に行われています。

鳥取県東郷湖も同様の小屋を湖岸に設置、主にエビ・ワカサギ・シラウオなどを捕獲しています。かつては三〇基近い小屋が湖岸に見られましたが、現在は松崎の湖岸に二つ、水明荘の裏に一つ観光用に残され、東郷湖の風物詩の一つになっています。和歌山県広川流域の四手網は春を告げる魚シロウオがターゲットです。発祥は江戸時代とされ、こちらは川岸から梯子を渡した脚立状の足場を組み、その上から四手網を操作するものです。長野県諏訪湖では舟渡川など湖に流入する川岸に「大四手網」と呼ばれる一辺六メートルサイズの四手網がかつて林立していたとのこと。こちらでの対象魚はコイ・フナなど比較的大型の淡水魚です。

琵琶湖の四手網漁は、漁船の船首部分に四手網形状の網がセットされ、アユの群れを見つけて船の先をつっこみ網ですくいと琵琶湖特有の漁法

ここまでの事例とちよつと異なるのが琵琶湖の四手網漁です。漁船の船首部分に四手網形状の網がセットされ、アユの群れを見つけて船の先をつっこみ網ですくいと琵琶湖特有の漁法です。漁船の中央部には、小鮎の群れを見つげるための高さ約二メートルの物見デッキが設けられ、また高速で群れを追いかけるために高出力のエンジンが搭載されています。なお、琵琶湖に流入する姉川などでは、手持ちの小型四手網による小鮎漁も行われています。まだまだ丹念に探せば、この伝統漁が受け継がれている地域はあると思います。かつては江戸隅田川のシラウオも佃島の漁民によつてこの四手網で漁獲され将軍家に献上されていたようですし、また海外に目を転じれば、インドネシアなど東南アジア各地の河川部でも盛んに操業されていたということです。



写真 40 萩市の松本川河口部で操業されるシロウオ四手網漁。ここから 500 メートル下ると日本海。

小型漁船での操業が特徴

本題「萩のシロウオ四手網漁」を詳しく見ていく

さて、本題「萩のシロウオ四手網漁」を詳しく見ていくことにします。シロウオ漁を行う漁業者等で組織された任意団体「萩白魚組合」（代表者・井町広満氏、組合員数・一六名）のメンバーが春先の二月中旬から四月上旬の短い期間操業しています。漁場は萩市を流れる松本川の河口部で、国道一九一号線に架かる萩橋から雁島橋と呼ばれる最下流にある橋の付近、距離にして五〇〇メートル程度のごく狭い流域に限られています。水深も一〜二メートルと浅く、砂泥に礫が混じる川底です。この流域に春先シロウオが産卵のため遡上するところを捕獲するのです。

網は一辺が約四メートル大の正方形（長方形の網を使用する漁家もある）で、十文字にクロスしてカーブを付けた竹で網の四隅を連結。竹をクロスさせた頂点の位置に、船から伸ばした長さ約六メートル木製のポールを結束する。漁船の中央部にマストのように木製の支柱を立て、支柱の先端には滑車をセットする。支柱先端の滑車と網の頂点部にある滑車に網揚げ用のロープを通し、人力にて揚網を行います。使用する船舶は一五〜二〇フィート程度のFRP和船で、大きな網の操作がし易いようにデッキやキャビンの無いシンプルな形状、動力は小馬力の船外機です。

四手網に入ったシロウオをイケスに移す柄杓型のザルも、この漁独特の小道具です。

ここ一〇年の水揚量は約五〇kgから七〇〇kgと大きな年変動があり、平均すると概ね三〇〇kg程度

次に四手網漁による漁獲量の推移を見えます。図13の通り、ここ一〇年の水揚量は約五〇kgから七〇〇kgと大きな年変動があり、平均すると概ね三〇〇kg程度です。記録を遡ってみると昭和二五年では約七トン、当時は灯火による夜間操業だったようで資源保護の観点から昭和三〇年以降は灯火操業を禁止、昭和三九年から平成四年までは一トン〜四トンの間で推移しています。松本川河口地域である浜崎地区のお年寄りにお話を聞くと、昭和の時代には、春先になると川岸近くをシロウオの群れが遡る様子が普通に見られ、岸辺から目の細かい手網で、子供でも簡単に掬いとれたとのことでした。

平成一〇年以降は先述のとおり三〇〇kg平均まで落ち込んできています。平成一四年は過去最低の五五kgとワースト記録をマーク、平成一八年には六七〇kgまで回復を

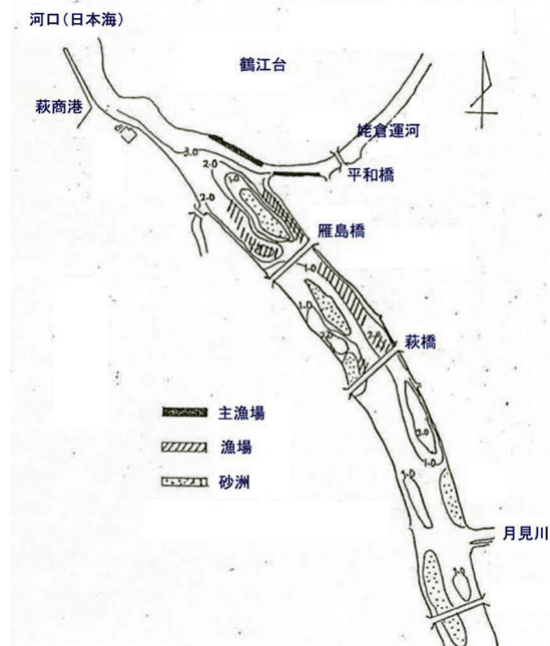


図12 萩市松本川下流域のシロウオ漁場 (資料:昭和54年・山口県外海水産試験場)



写真41 四手網を揚げるところ。大きな網を操作するため、船舶はシンプルな船形状。



写真42 網に入ったシロウオを柄杓で掬うところ。網の表面を柄杓でポンポンとリズムカルに叩くと、シロウオが柄杓に入る。

獲れたシロウオの近くの網の表面を、この柄杓の底でポンポンという感じでリズムカルに叩くと、網の弾力でシロウオが柄杓の中に見事に納まります。このシロウオ四手網漁、一〇年前に僕もTV取材のアテンドで同船させていただく機会があり網の操作を体験しましたが、網が結構重いのと、網が大きく風に煽られて大変な思いをしました。この大きな網を一人で操作するには実際かなりの熟練が必要です。

資源減少で水揚量は低迷

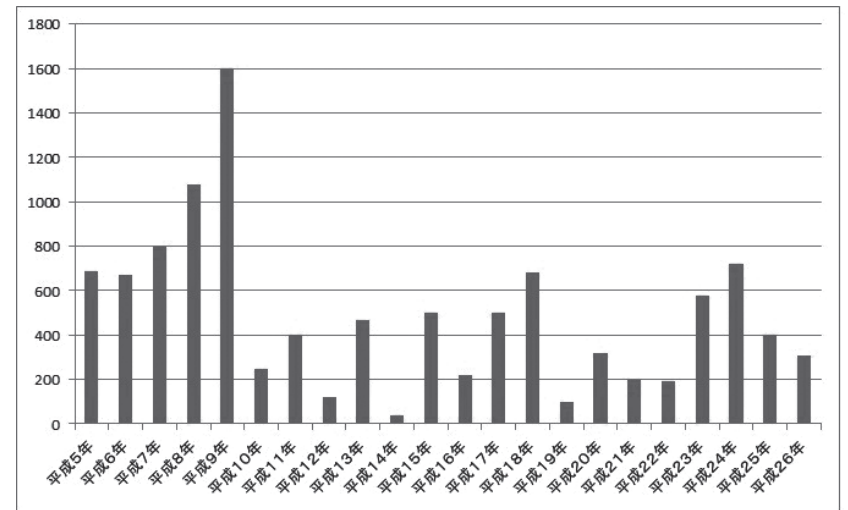


図 13 シロウオ漁獲量推移。平成 10 年以降は 300kg 平均と激減している。(資料提供：萩白魚組合)

見せていますが、関係者の間ではシロウオ資源量の減少が危機感を持って語られるようになってきました。

シロウオは萩市の大切な観光資源

年間生産量が一トンにも満たないシロウオ、活魚パックでの売価ベースでのキログラム単価を七、〇〇〇円としても、近年平均三〇〇キログラムで総額二〇〇万円ちよつとと僅かな生産額なのに、ここ萩市で重要魚種として騒がれるのは訳があります。冒頭でも紹介しました通り、このシロウオは「萩の早春の風物詩」として重要な観光資源だからなのです。毎年二月中旬から三月中旬のシーズンには名物「シロウオ踊り食い」が市内飲食店・旅館ホテルにて観光客に供されます。また毎年三月第一日曜日には「萩しる魚まつり」が開催され、一五、〇〇〇人の観光客を吸引



写真 43 萩のシロウオ、通常は酸素充填したパックで販売される。一袋で約1合(180g程度)法被には「毛利藩御墨付白魚…の文字が。

する一大イベントとして定着しています。特にこの時期は同時開催される「萩・椿まつり」との相乗効果で、萩市の入込観光客数が大きく伸びるピークシーズン、ここでシロウオを失うことは、萩市の観光にとって大きなダメージになりかねないのです。

漁業者自らが資源回復に取り組む

資源減少の原因は複数の要因が交錯している

上流部の阿武川ダム建設により水量が少なくなり下流域にヘドロの堆積が見られるようになったこと。産卵場所である萩橋上流部の砂州浚渫によりシロウオの産卵場が縮小したこと。萩沖でのシラス二艘曳漁の操業が盛んになり、遡上前に沖合でシロウオが混獲されることが多くなったこと。萩橋上流部のシロウオ産卵場所で行われるシジミ漁による影響など、資源減少の原因は複数の要因が交錯しているようです。

前述の萩白魚組合では資源減少に歯止めをかけるため、昭和四八年から組合メンバー総出で投石による産卵場所造成や川底の攪拌作業を毎年一月中旬の漁期前に定期実施するようになりました。夏と冬、年に二回の河川清掃も組合が中心になって実施されています。また山口県水産研究センターでは、萩白魚組合の要請を受け同組合とともに、昭和四四年から毎年、同河川においてシロウオの産卵状況を調査、川底攪拌や投石作業による産卵場造成効果を定期的に計測チェックし、対策に役立てようとしています。



写真 44 シロウオの産卵床となる小石、この石の下に潜り込んで産卵する。



写真 45 萩白魚組合のメンバーで産卵床となる小石を投石していく。

「萩しろ魚まつり」は春先の定番イベント

萩しろ魚まつりの概況をご紹介します

伝統漁を観光資源として活用している一例として、萩しろ魚まつりの概況をご紹介します。主催は公益社団法人…萩市観光協会、毎年三月第一日曜日の定期開催で、初回からすでに三〇年近く継続している萩市の定番イベントです。会場は山口県漁協萩地方卸売市場と隣接の道の駅／萩シーマートで開催されます。プログラム内容はシロウオを活きたまま酢醤油（地元ではスイチ）につけて食べる名物「踊り食い」の無料



写真 46 萩しろ魚まつり「シロウオ踊り食い」の無料サービス。約3,000名に振る舞われる。



写真 47 大鍋で調理する名物「しろうお雑炊」



写真 48 シロウオ活魚パック販売。人気商品で毎年すぐに売り切れ。



写真 49 萩市内各所の飲食店・旅館で提供される「シロウオ踊り食い」



写真 50 地元では、シロウオのかき揚げや卵とじ汁が定番メニュー

毎年約一五、〇〇〇人が県内外から安定的に来場され、萩市の早春イベントとして定着

サービス（約三、〇〇〇名）をメインに、シロウオの卵とじ汁やシロウオうどんなど新鮮なシロウオを使った料理の販売などもあります。

人気コーナーはシロウオの活魚販売、酸素充填したパックに活きたシロウオを泳がせた状態で提供、常温で二四時間以上元気に泳いでいますので宅配便等での地方発送も可能です。約一合（一八〇g）のシロウオが入って通常売価は一、三〇〇円程度です。また、白魚組合の協力を得て、伝統の四手網を使ったシロウオ漁の体験（二人一、五〇〇円・シロウオ活魚パック一袋サービス）も実施されます。

毎年約一五、〇〇〇人が県内外から安定的に来場され、萩市の早春イベントとして定着を見えています。この時期、萩市内の飲食店・旅館ホテルでもシロウオ料理が提供され、シロウオを味わうために早春の萩市を訪れる観光客も少なくありません。この際提供される料理は名物「シロウオ踊り食い」がメインで、一〇尾程度のシロウオを萩焼の器に泳がせて、酢醤油の入った杯と直径四センチの掬い網を添えて出てきます。一人前が三〇〇円〜五〇〇円ですのでそれなりに高価なメニューではありますが、この時期ここでしか味わえない旬の地産メニューとして人気があります。

このように萩市では伝統漁によるシロウオが大きな観光資源になっているのです。

終章 伝統漁を無形民俗文化遺産に

伝統漁「伊勢志摩地方の海女漁」が国指定の文化財にエントリー

平成二六年五月二八日、三重県伊勢志摩地方の海女漁を、国の重要無形民俗文化財指定に向けて、鈴木英敬三重県知事と関係団体が下村博文科学大臣に要望書を提出

先日東京にて水産関係の会議があり、三重県漁業協同組合連合会の役員の方とお話しをする機会がありました。聞くところによると、平成二六年五月二八日、三重県伊勢志摩地方の海女漁を、国の重要無形民俗文化財指定に向けて、鈴木英敬三重県知事と関係団体（海女保存会、三重県漁業協同組合連合会）が下村博文科学大臣に要望書を提出されたとのこと。ゆくゆくはユネスコ無形文化遺産への登録を視野に入れていくことで、なかなかスケールの大きな楽しい話です。この海女漁はすでに県指定の文化財登録を受け、海女漁の保存継承に関する協議会（全国海女文化保存・振興会議）の設立など、海女漁の意義や特色ある民俗技術が広く社会に伝わることを目的に、積極的な活動が展開されています。

各都道府県の登録文化財関係の資料を当たってみると、三重県の「海女漁」（三重県指定無形民俗文化財）を筆頭に、伊東市「富戸の魚見小屋」（静岡県指定有形民俗文化財）、「輪島の海女による伝統的素潜り漁技術」（石川県指定無形民俗文化財）、「高地域の地曳網漁用具および和船」（和歌山県指定有形民俗文化財）、「小瀬鵜飼技法」（岐阜県指定無形民俗文化財）と、伝統漁法・漁具関係のものがいくつかピックアップできますが、全体から見れば登録数はごく少ないのが現状です。第二章で紹介した芦北町の「打瀬網漁及び打瀬船」も、平成一一年に芦北町の無形民俗文化財（町指定）には登録されていますが、まだ県指定までには至っていません。水下曳漁や萩しろうお四手網については、これまでその検討の対象に入ったことも無かつたようです。

「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」（水産庁）

地域固有の漁業文化や珍しい漁具・建造物などを基準として一〇〇案件を選定・公表

二〇〇六年（平成一八年）水産庁が「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」を全国公募、応募のあった三五〇件から地域固有の漁業文化や珍しい漁具・建造物などを基準として一〇〇案件を選定・公表しています。芦北の打瀬網船はそのひとつとして選定されていますが、どちらかといえば漁具・漁船・建造物・史碑・漁港施設・街並など「有形」が中心で、「無形」となる漁法については、琵琶湖の伝統的漁法（鮎と梁）などごく少数です。「有形」に重きが置かれることは理解できますが、有形物は所詮、手段・道具であって、本来の価値は「無形」の漁撈文化・漁業技術（漁業者の営みのあり様）にあるのではないかと思います。その意味で、全国各地でその地域に引き継がれ現存している伝統漁を動画として収録保存しておくことは重要だと感

じます。漁業者の高齢化や後継難による継承の断絶など、貴重な伝統漁法が消え去りつつある昨今、このことはちよつと急いでやらないといけないことかもしれません。

水産庁「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」リスト

●北海道

鯉漁場建築（小樽市）

旧下ヨイチ運上家（余市町）

袋澗（利尻富士町）

横山家（江差町）

石崎漁港トンネル航路（上ノ国町）

函館漁港船入澗防波堤（函館市）

●東北

津軽海峡及び周辺地域のムダマハギ型漁船コレクション六七隻（青森県青森市）

漁撈用具と浜小屋（青森県八戸市）

机浜漁村番屋群（岩手県下閉伊郡田野畑村）

三陸津波伝承施設

田老防潮堤（岩手県宮古市）

両石津波記念碑（岩手県釜石市）

根岬はしご虎舞と黒崎神社（岩手県陸前高田市）

みなと祭りと御座船（宮城県塩竈市）

由利海岸波除石垣（秋田県にかほ市）

十六羅漢岩（山形県飽海郡遊佐町）

松川浦の浦口（福島県相馬市）

●関東

常陸大津の御船祭と祭り船（茨城県）

帆びき船（茨城県）

山本家住宅（茨城県）

銚子漁業開拓の歴史（川口神社、千人塚、外川漁村）（千葉県）

岩船地藏尊（千葉県）

南房総捕鯨伝承施設（千葉県）

船橋大神宮灯明台（千葉県）

江戸東京漁業ゆかりの地、佃島・日本橋・築地（東京都）

高森灯台（東京都）

和船五艘（神奈川県）

真鶴の漁業伝統（神奈川県）

●中部

伝統的サケ漁と捕獲施設（コド、居繰網）（新潟県）

佐渡の伝統風景（宿根木の街並み、たらい舟）（新潟県）

生地中橋（富山県）

漁民義人塚（富山県）

氷見の漁業伝統（富山県）

奥能登の間垣（石川県）

舳倉島（石川県）

能登の漁業伝統（胴船、鯨伝説碑）（石川県）

北前船主の集落（石川県）

韓国船遭難救護の碑（福井県）

富戸の魚見小屋（静岡県）

網屋崎の網小屋（静岡県）

大瀬神社（静岡県）

一色干潟（愛知県）

志摩漁業の土木遺跡（波切漁港石積み護岸、深谷水道）（三重県）

●近畿

琵琶湖の伝統的漁法（魰、梁）（滋賀県）

ホンミチ（滋賀県近江八幡市）

雄島参りと冠島沖（京都府舞鶴市）

舟屋群（京都府与謝郡伊根町）

佃漁民ゆかりの地の碑（大阪府）

住吉神社の能舞台（兵庫県）

岩屋漁港の絵島（兵庫県）

由良港と成ヶ島（兵庫県）

室の泊（室津漁港）（兵庫県）

神権伝説の島（兵庫県）

太地町捕鯨歴史文化財（和歌山県太地町）

広村堤防（和歌山県）

矢櫃地区歴史文化財（和歌山県）

●中国

湖山池の石がま（鳥取県）

青石畳（島根県）

経島（島根県）

都万漁港船小屋（島根県）

大多府漁港元祿防波堤（岡山県）

むかし下津井回船問屋（岡山県）

- 江波の曳き船 (広島県)
沖家室の漁村集落 (山口県)
祝島の神舞と石積み集落 (山口県)
牛島漁港藤田・西崎の波止 (山口県)
下関漁港閘門 (山口県下関市)
青海島鯨墓 (山口県)
- 四国
- 堂浦のテグスといやしの杜、阿波井神社 (徳島県)
出羽島の漁業史記念物 (阿波沓発見者功績の碑、石積みの防波堤) (徳島県)
安戸池 (香川県)
箕浦漁港 (香川県)
佐田岬漁港の石垣 (愛媛県)
水が浦の段々畑 (愛媛県)
外泊の石垣 (愛媛県)
室戸捕鯨関連文化遺産 (高知県)
伊尾木漁港石積堤 (高知県)
久礼大正町市場 (高知県)
- 九州・沖縄

- みあれ祭りと宗像大社中津宮 (福岡県)
津屋崎千軒 (福岡県)
相島波止 (福岡県)
有明海佐賀福岡両県漁場境界標石柱 (福岡県)
小川島鯨見張所 (佐賀県)
沖ノ島とおしまさん (佐賀県)
すくい漁場 (長崎県)
アホウ塀と歴史的建造群 (長崎県)
木坂の藻小屋 (長崎県)
有川捕鯨関連文化遺産 (長崎県)
カグラサン (長崎県)
ドリュール女史記念碑 (熊本県)
うたせ船 (熊本県)
崎津天主堂 (熊本県)
御船寄 (大分県)
姫島七不思議 (浮洲、千人堂) (大分県)
保戸島集落 (大分県)
油津の港物語 (堀川運河、杉村金物本店主家・倉庫、チヨロ船) (宮崎県)

桁打瀬船（鹿児島県）
鹿島離島住民生活センター（鹿児島県）
羽島漁港（鹿児島県）
南方漁場の開拓者原耕の像（鹿児島県）
山巔毛と白銀堂（沖縄県）
魚垣（沖縄県）

地域を越えて結集「日本の伝統漁業遺産群」

文化財登録については門外漢で、詳しい指定登録の基準や手続きについては全くの不勉強ですが、都道府県指定の重要無形民俗文化財の登録リストを見ると、ごく限られた地域で行われている小規模なお祭り（民俗祭事）が、各都道府県ともそれぞれ数十件の単位で登録されています。また民具として伝統漁の漁具が指定登録内容の一部を構成しているケースも数多くあります。そもそも伝統漁（漁撈文化）自体は無形民俗文化財として認識されていなかったような印象を持ちますが、三重県の海女漁をはじめとして上記の数少ない指定事例を見る限り、全国各地で現存する伝統漁の無形民俗文化財としての指定登録は、決して不可能ではないと思います。

少なくとも文化財登録によって、一般の方々には忘れ去られていた地域伝統漁法に、再度注目をいただくきっかけになる筈ですし、体験プログラムとして観光資源化している伝統漁には集客促進の大きな宣伝材料になります。また、伝統漁法による漁獲物をブランド化している地域にとっても、文化財指定は大きなメリットになると考えます。

近年のユネスコ世界遺産登録でも「幕末明治の近代産業遺産群」といった枠組で、地域を越えて同じカテゴリーの遺産群がグループとして登録検討されるようになっていきます。伝統漁法の保存継承に力を入れている地域が県境を越えてタイアップし「日本の伝統漁業遺産群」というカタチで名乗りを上げることがも有効な手段かと思えます。

この終章あとがきを書きながら、「日本伝統漁法サミット」なる全国区シンポジウム開催も面白いかなと思っています。専門家による日本伝統漁法についての基調講演、全国で受け継がれている地域伝統漁法の現況についての地域事例報告、複数地域の漁業者による伝統漁法継承のパネルディスカッション、伝統漁で漁獲された魚介類の試食評価会、エクスカージョンとして伝統漁体験などなど。我が国に引き継がれてきた貴重な伝統漁法を広く世の中に広報PRし次代に継承していく、ひとつのきっかけになるのではと思っています。（二〇一四年八月 自宅にて）

時事余聞

◇…今年は災害の多い年だ。長野県と岐阜県にまたがる長野山が噴火し、死者が五六人に達した。しかし、なお七名の方の行方が分からない。警察と消防、陸上自衛隊の救助隊は必死の捜索を続けてきた。しかし、大型で非常に強い台風の接近のため、捜索困難な状況が続き、噴火から一九日目の今月六日に、長野県知事は今季の捜索を打ち切ることを発表した。

◇…一方、一八号に続く一九号台風も非常に強い大型であった。これまでも家屋の損壊や死傷者も出ている。自治体や消防、行政の努力で最小限に抑えられているが、被害は後をたたない。これまでに特筆されるものは、昭和の三大台風である。これらの被害は甚大である。室戸台風は一九三四年九月二一日高知県室戸岬付近に上陸。死者二七〇二人、不明者三三四人を出し、上陸したあとは関西を縦断し北陸地方に抜けた。当然、強風による建造物被害や大雨と大潮による浸水被害が発生。取り分け大阪府は校舎が倒れ、先生や生

徒がたくさん亡くなった。

◇…一九四五年九月一七日、枕崎に上陸した枕崎台風。宮城県では最大瞬間風速七五・五mを記録。死者二四七三人、行方不明者二二八三人。終戦直後の襲来であった事も影響した。戦争時の伐採で山は裸同然で土砂被害が多発した。特に広島県での被害が大きく、原爆の惨禍に輪をかけた。

◇…それに伊勢湾台風、一九五九年九月二六日に潮岬付近に上陸、勢力を維持したまま本州を縦断、死者四六九七人、行方不明四〇一人。港の形状から記録的な大潮が発生、伊勢湾沿岸での被害が特に大きかった。大規模な浸水によって三〇〇〇人以上の死者が出る大惨事となった。

◇…こうした経験を通じて、日本は災害に対する強さが構築されてきた。消防団、陸上自衛隊、行政機関や民間との提携がスムーズに実現していることが挙げられる。国民の意識も災害に向けられ、危機切り抜けに集結されやすくなった。官民一体となった協力が次第に強化され始めているといえる。(K)

編集後記

伝統漁法とは何かの説明から現在筆者の手にある全国漁業協同組合連合会がまとめた「今に生きる伝統技能・漁法集」(総集編)に掲載されている二八種の漁法から特徴的なものについて説明。更に「水下曳漁」「打瀬網漁」「しろうお四手網漁」の三漁法について詳述されています。その漁法の歴史を辿ると共に漁具や装備などもリアルに述べられています。伝統漁法の読み物として楽しめる内容となっています。筆者に心からお礼申し上げます。

「水産振興」第五六二号

平成二十六年一〇月一日発行

(非売品)

編集兼 井上恒夫
発行人

発行所

〒104-0055 東京都中央区豊海町五番一号
豊海センタービル七階

一般財団法人 東京水産振興会

電話 ☎ 三五三三八二一
FAX ☎ 三五三三八二六

印刷所 (株)連合印刷センター

(本稿記事の無断転載を禁じます)

ご意見・ご感想をホームページよりお寄せ下さい。

URL <http://www.suisan-shinkou.or.jp/>

平成二十六年一〇月二日発行（毎月一回一日発行）五六二号（第四十八卷一〇号）